

1月26日（日） ショートメッセージ

聖書 イザヤ書 8章23節b～9章3節 （旧約 1073頁）

メッセージ 「大いなる光」

闇の中を歩む民は、大いなる光を見 死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。

（イザヤ書 9章1節）

（1）本日は九州教区「性差別を考える日」です。今から約25年前に、九州教区にある教会で牧師によるセクシュアル・ハラスメント事件が起きました。被害者は九州教区へ被害を訴えました。ところが、九州教区はその訴えを真摯に受け止めることが出来ず、訴えを受けた者たちは加害者である牧師を擁護し、被害者をさらに傷つける過ちを犯してしまいました。九州教区では教区総会の中で、この過ちを犯したことを教区の課題として向き合い、教会内のセクシュアル・ハラスメント根絶に向けて取り組みを続けていくことを決意しました。

九州教区「性差別を考える日」が、この決意を新たにする機会としても用いられますようお願いしています。

（2）本日の箇所は、「性差別を考える日」とは重なりませんが、連続して取り上げてきた聖書日課の中から旧約を選びました。本日の聖書日課の福音書では、先週触れたイエス様の宣教開始が宣言された記事が選ばれています。この記事の中で、イエス様がガリラヤ地方のカファルナウムから宣教を開始されたことは、預言者イザヤの預言した言葉の通りであるとして、イザヤ書8章23節が引用されています。

引用のもととなったイザヤの預言を見てみましょう。この預言にあるゼブルンの地、ナフタリの地は後のガリラヤ地方のことです。かつて敵国のアッシリアによって占領された場所です。この預言では、ガリラヤ地方は異邦人の地とされ、この地に住むユ

ダヤの民は、闇の中を歩む民、死の陰の地に住む民であると言われています。

しかし、ガリラヤに解放を告げる王が誕生する。その王によって、ガリラヤのユダヤの民は神の栄光を受ける。民は大いなる光を見、民の上に光が輝くとこの預言は伝えます。その王は、ダビデの家系から出る王であり、7章で言われているインマヌエルと呼ばれる王である。福音書が引用したように、この預言はまさにイエス様が現れることを伝えている預言のようです。

イザヤのこの預言は、戦争の終わりと平和を伝える預言です。戦争によってもたらされる苦しみ、痛みからの解放の喜びが、この預言によってあらわされています。

「彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭をあなたはミディアンの日のように折ってくださった。地を踏み鳴らした兵士の靴、血にまみれた軍服はことごとく火に投げ込まれ、焼き尽くされた。」（3～4節）。

「軛」、「杖」、「鞭」とは、アッシリアの支配のことであるといわれています。「ミディアンの日」とは、士師記6章～8章に登場するミディアン人による攻撃のことを指します。

（3）このイザヤの預言は、平和をもたらす王の誕生を伝える預言です。求められているのは、抑圧と戦火をもたらす王ではありません。平和を求める人々の切なる願いに共感され、平和を実現する人々は幸いであると教えたイエス様を、私たちの王として迎えましょう。（多田玲一牧師）